五行について

基　礎　理　論　§　古　典

土方康世
校正：峯　尚志

五行の基本概念

五材の概念

人は社会生活を維持するうえで、木・火・土・金・水を必須材料と見なし「五材」と称した。五材は各異なった特性をもち、すべての現象や物質は五材の属性に大別帰納でき、さらに五材の間には、相互資性、相互制約の関係があると認識した。

五行の意味

五行の「行」には運行という意味が含まれている。木・火・土・金・水という絶え間なく運動変化している五種の物質によって、物質世界の運動変化を説明する。（運動変化：生体内代謝も含む）五行間には相互に促進する（生ずる）面と、制約する（克す）面がある。又五行間の「生」と「克」には正常な状況のものと異常な状況のものがある。

五行学説の基本的内容

五行の特性

各行の特性は古人の長期にわたる観察によって形成された素朴な認識に基づく。木・火・土・金・水という物理・化学の特性を抽象化して次第に理論的概念に変化した。

木の特性

木は樹木で屈曲伸張し、上方外方へと条達舒暢するので、「木は曲直をいう」とされる。肝には条達を喜ぶ疏泄機能を有するという特性があるので、肝は木に属させる。

火の特性

火は炎熱で、火炎は上方に向かうので「火は炎上をいう」とされる。温熱・昇騰（昇りあがる）の性質を持つ事象を火に帰属させる。

土の特性

土は大地であり、万物の母で「土は万物を生ず」「土は四行を載せる」「土は稼しょくを援く」春の種植が稼、秋の収穫が穡（しょく）。これに基づき生化・承載・受納の性質のあるものを土に帰属させる。

金の特性

金は金属で、重沈で降下・急促の性質があり、「金は従革をいう」とされる。従革とは変革・革除の意味。これに基づき、粛降・変革・収斂の性質を持つもの（肺）を金に帰属させる。

水の特性

水は火と相反し、滋潤・下行の性質を持ち、「水は潤下をいう」とされる。潤は滋潤、下は下向・下引である。腎には水を主り、精を蔵する機能があるのでこれに基づき、水に帰属させる。

五行の属性

1. **事物の五行属性**

   事物の性質や作用は、「取類比象」すなわち五行の属性に比類することにより、五行のいずれかに帰納させることが出来る。

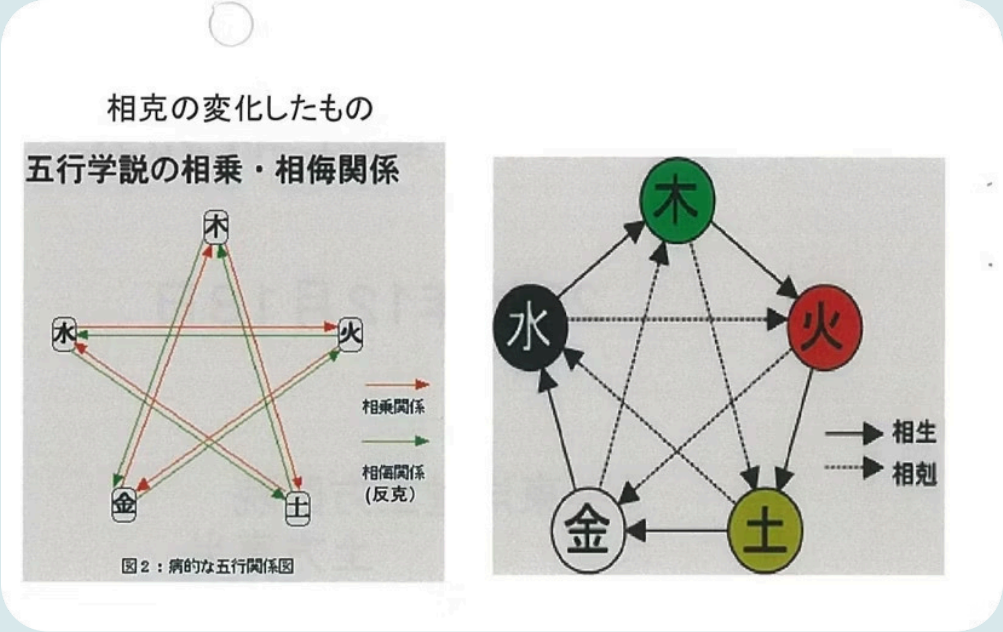
2. **類似性による帰納**

   例えば事物の性質が水の特性に類似していれば水に帰納する。土の特性に類似していれば土に帰属させる（肝は木に、心は火に）。

3. **系統的関連性**

   自然界の全ての事物を五行に帰属させたうえ、五行間で大きな系統を形成しているとみなし、五行間の相互制約、相互関連の規律を示す。

五行と臓腑の関係



五行	臓	腑	機能
木	肝	胆	疏泄・調達
火	心	小腸	温煦・推動
土	脾	胃	運化・消化
金	肺	大腸	粛降・呼吸
水	腎	膀胱	蔵精・水液代謝

五行の生・克

1 **相生**

五行の内のある１行が、別の１行に対して資生・促進・助長に作用すること（ある１行を母、資生する相手を子という。逆に母が病気になると、子は助けを受けられない）。

木→火→土→金→水（→木）の順になる。

2 **相克**

五行の内のある１行が、別の１行に対して制約・抑制的に作用すること。木・火・土・金・水の一つおきに（木→土、火→金、土→水、金→木、水→火）

3 **生克の規律**

五行の生と克の規律は、五行の制約と生化の規律である。五行の相生と相克は正常な運行を維持するうえで不可欠である。生がなければ、事物の発生と生長はなく、克がなければ過亢進が発生して協調平衡が保持できなくなる。

五行の乗・侮

乗・侮の概念

五行の正常な生・克の関係がくずれて出現する異常な相克の現象を相乗・相侮という。

相乗は、勢いに乗じて相克すること。相乗を起こす条件は、ある１行が強くなり過ぎ、それが克する１行を過度に克制する場合と、克される１行の不足があり虚したために、克する１行が侵襲し相手の虚を助長する場合。

相侮は、反克に当たる。ある１行を克するはずの１行が、それを克することができないだけでなく、逆に克され（反克）、制約を受けること。相侮を起こす条件は、ある１行が強すぎるために、本来克される相手を克したり（反克）、ある１行が虚弱になりすぎるために、克すべき相手から克される。

ある１行が強すぎると相侮も相乗も出現する可能性がある。

五行と方位の関係

東方（木）
肝と関連する方位
春の気が強まる方向

南方（火）
心と関連する方位
夏の気が強まる方向

中央（土）
脾と関連する方位
長夏の気が強まる方向

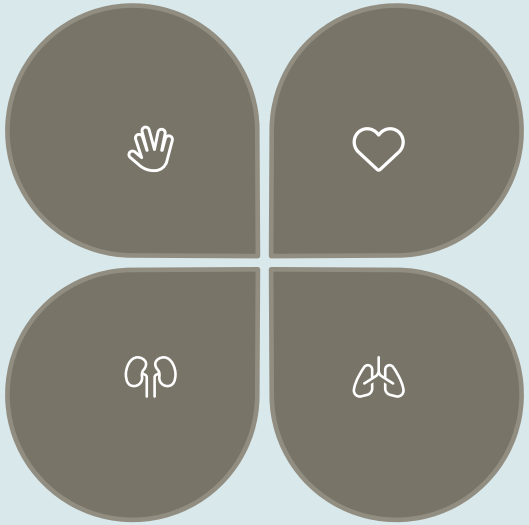
西方（金）
肺と関連する方位
秋の気が強まる方向

北方（水）
腎と関連する方位
冬の気が強まる方向

五行の相生

肝生心

肝は疏泄をつかさどり、全身の陽気の調節をする。春に肝気は強くなる。真っ先に肝気を伝えるのは心である。



心生脾

君火によって、脾はうまく作動する。

腎生肝

腎の陰性物質が沢山出来ると、肝の陰性物質も沢山出来る（病的：水不函木）

脾生肺

脾で作られた精微物質が肺に真っ先に運ばれ肺を潤す。

五行の順番は、人体発生の順：腎→肝→心→脾→肺。

"生""克"は正常状態を保つためのコントロールを意味する。A乗BはAの病気がBも病気にする。E反剋Cは、本来Cが、Eの過亢進を予防をしているはずが、Eの病気がCを病気にする。

五行の相克

腎克心

心の火は君火で強い。強すぎると病気になる。それを予防する意味で腎から水を上げて冷ます。病的な心経実火（不眠・煩躁）で、腎水不足のことがあると舌炎がおこりうる（心腎不交）。滋陰降火（心火瀉し補腎水：心腎相交：黄連阿膠湯）

心克肺

頻度は少なめ（相乗：心不全で肺水腫）。反克（肺炎で心の状態が悪くなる肺性心）の頻度が多い。

肺克肝

肝の負荷を肺で緩和。実際は、肝刑肺（反克）が多い（急性肝炎で咳や血痰）。

肝克脾

腹痛が起きないように、自律神経（肝）が調節する。

相乗：肝の異常亢進（ストレス負荷）が腹痛下痢を引き起こす（肝脾不和）（木乗土）。**反克**：最初に下痢があり、肝炎が起きてくる急性A型肝炎（土虚木乗）。

脾克腎

貯まりやすい腎水を、脾でさばく。脾陽虚が腎陽虚を引き起こす（相乗）。腎炎悪化で下痢（反克）。益火生土（腎陽を補い脾陽を温煦）

素問（新釈：小曽戸丈夫）

木克土　木が土から克されるときは、その病は割と軽い。しかし、木が土を克していて、さらに土が邪を受けると非常に重症である。他の行についても同じである。草木は青赤黄白黒の五色を表す。又、酸苦甘辛鹹の五味を生じる。その組み合わせはとても複雑である。およそ天は、風熱燥湿寒の五気を以て人を養う。地は酸苦甘辛鹹の五味を以て人を養う。天の五気は鼻から体内に入り、心や肺の働きにより上にのぼって行って、目には色が鮮やかに写るようにする。声では五音が出るようにする。地の五味は、口から体内に入り、胃腸で消化吸収され、五臓に入って、魂神思魄精の五つの精気を養う。これらの働きにより、営衛の気は調和して、それぞれの営みを生じる。

五臓の形態

1 **心の形態**

心は生命活動の源で、神気の現れ。心の表徴は顔面に出、それが養っている所は血脈である。心は横隔膜の上にある陽気の多い陽臓であるから、陽中の太陽であるとされ、一部、夏の成長の気に共通する。

2 **肺の形態**

肺は呼吸を営み、呼吸によって陽気である脈気は運行する。魄気が存在する。肺の表徴は体毛に現れ、それが養っているところは皮膚である。肺は横隔膜の上にあるので陽位であり、割合に陽気の多い陰性の臓である。陽中の太陰であるとされ、秋の収斂の気に共通する。

3 **腎の形態**

腎は精気をしまいこんで、陽気を妄りに出さないようにしている本体で、精気が存在する所である。腎の表徴は髪の毛に現れ、それが養っている所は骨髄である。

1

腎の位置と性質

腎は横隔膜の下にあり、陽気の少ない陰性の臓であり、陰中の少陰とされ、冬の蔵臓の気に共通する点がある。

2

肝の形態と機能

肝は、心身を緊張させるために生ずる疲労を受ける本となる器官であり、魂気の存在する所である。肝の表徴は爪に現れ、それが養う所は筋である。肝には又、血の働きを生じる作用があり、酸味のものに親和性をもっており、その表す色は青である。肝は横隔膜の下にあり、陰位であるが、陽気が芽生えている陽性の臓であるから、陰中の少陽であるとされ、春の発生の気に共通する。

3

消化器官の特徴

脾・胃・大腸・小腸・三焦・膀胱は飲食物の倉庫で、栄養の本家である。これを器というが、飲食物を変化させてそのカスを排泄したり、五味を生み出してそれぞれの臓腑に配給する消化器官のことである。

1 **消化器官の表徴**

これらの表徴は唇の四囲に現れ、それらが養うところは肌肉である。これらは甘味のものに親和性をもっており、表す色は黄である。これらは、最も陰性の物で、万物の帰する土の性質に共通する点がある。

2 **臓腑の数**

以上臓と腑の数は十だが、これらの均衡を維持するものが胆である。合わせて臓腑が十一となる。

3 **五臓生成篇**

心の合、即ち心の気の集まるところは脈である。その表徴は顔色である。その主、即ち心の気を制御するものは腎である。

肺の合は皮、その栄は体毛、その主は心である。

肝の合は筋、その栄は爪、その主は肺である。

脾の合は肉、その栄は唇、その主は肝である。

五臓と五味

1 **腎の合と栄**

腎の合は骨、その栄は髪、その主は脾である。

2 **五味の過剰摂取の影響**

鹹味の物を食べ過ぎると、血が粘稠となって脈行が渋り、顔色が光沢を失う（水相乗火）。

苦味を過食すると、皮がガサガサになって、体毛が抜けてくる（心相乗金）。

辛味を過食すると、筋がひきつって、爪が枯れてくる（金相乗木）。

酸味を過食すると、肉が萎縮して、唇が巻き上がってくる（木相乗土）。

甘味を過食すると、骨が痛んで、髪の毛が抜け落ちてくる（土相乗水）。

1 **飲食物の影響**

これはは飲食物の不摂生が原因で肉体を損なう場合。

故に心は苦味、肺は辛味、肝は酸味、脾は甘味、腎は鹹味の飲食物によってそれぞれ栄養される。

2 **味の過剰摂取の影響**

味に酸が過剰→肝気が充実しすぎて脾気が損なわれる

味に鹹が過剰→腎気が過大になり、肌肉の力が減少して皮膚がガサガサする様になる（水反克土）。また心気が抑制され、脈の流れが渋る（水相乗心）。

甘味が過剰→胸苦しく息が荒くなる（土→金：病的相生）、皮膚が黒ずんできて腎気が不均衡（土相乗水）

苦味が過剰→脾気十分に栄養を巡らさないで肌肉痩せる（病的相生：心火→脾土）

辛味が過剰→筋脈が弾力を失い弛緩し正気も心気も尽きる。（金反克火、病的相生；土生金）

方位と四季

陰陽応象大論篇

東の方角は春にあたり、陽気が発生して風を生じる。風の作用で木が育ち、木からは酸味をもった食物が得られる。酸味の食物は人体内で肝を栄養し、肝からは筋の機能を生じる。筋からは木生火の相生によって心の働きを生じる。肝は目の働きも司どる。春は神は天にあっては風となって作用し、地にあっては木を生じ、人体内では筋となり、五臓では肝、色では青、音は角、声は呼、病変としてはひきつって手を握りしめるようになり、五官では目となり、味は酸、精神的な働きとしては、怒りとなって現れる。怒りが過ぎると肝の機能が傷害される。怒り（木）が甚だしい時は、悲しみ（金）を与えてやると、金克木の相剋の法則で異常な怒りが抑制される。風気は本来筋を養うものですが、過ぎると却って筋を傷害する。風がひどすぎた時は燥（金）の状態にしてやると、金剋木で、風のもたらす傷害を抑える。酸は筋を養うが、酸が過剰になると、逆に筋を傷害。酸味が過ぎた時は、金性の辛みを与えてやるとその害が避けられる。

方位と四季（夏）

南方と夏

南の方角は夏にあたり、陽気強く熱を生じる。熱は火を生じる。火は物の味を苦くする。

苦味と心

苦味の食物は人体内に入ると心を栄養し、心は血の働きを生じる。血からは火生土で脾の働きを生じる。心は舌の働きを主る。

夏の特徴

夏時、神は天にあっては熱となって作用し、地にあっては火を生じ、人体内にあっては血脈となり、五臓では心、色では赤、声は笑、病変としては憂いの精神状態をおこさせるようになり、五官では舌となり、味は苦、精神的な動きとしては喜びとなる。

過剰な喜びの調整

喜びが過ぎると心の機能が傷害される。喜びが甚だしい時には、恐を与えてやると、水剋火の相剋の作用で異常な喜びが抑制される。又熱は肺の働きを傷害する、熱が強いときは寒で抑えることが出来る。苦味のものも熱に属するから肺の気を傷る。苦味が過ぎた時は水性の鹹味なもので、その害を避けることが可能である。

方位と四季（土用）

中央と土用

中央は夏の土用にあたり、湿度が最も高い時である。湿気は土としての働きを生じる。土からは甘味の食物を産する。

土用の特徴

土用の時は、神は天にあっては湿となって作用し、地にあっては土の働きをし、人体内にあっては肉となり、五臓では脾、色では黄、音は宮、声は歌、病変としては噯（しゃっくり）を起こさせるようになり、五官では口となり、味は甘、精神的な動きでは思となる。

過剰な思いの調整

思いつめると脾の機能が傷害される。思いつめた時は怒りを与えてやると、木剋土で異常な思いが抑制される。湿は肉の機能を傷害するが、湿が過剰であるときは風で抑えられる。甘味の食物は肉を養うが、過ぎると却って肉を傷る。甘味が過ぎた時は、水性の酸味で害を避ける。

方位と四季（秋）

西の方角は秋にあたり、乾いた気候の時。土を火で煉すると金属が得られる。金気の味は辛味で、辛味の食物が人体内に入ると肺を栄養し、肺は皮毛の働きを生じる。又皮毛からは金生水の相生の法則によって腎の働きを生じる。肺は鼻の働きを司どる。こういう訳で、秋時には、神は天にあっては燥として作用し、地にあっては金の働きとなり、人体内にあっては皮毛となり、五臓では肺、色では白、音は商、声は哭、病変としては咳となり現れる。五官では鼻となり、味は辛、精神的な動きは憂いとなって現れる。憂いに沈むと肺の機能が傷害される。憂いに包まれた時は喜びを与えてやると、火剋金の相剋の法則で異常な憂いが抑圧される。又熱は皮毛を傷害するが、熱が過剰である時は寒で抑制可能である（水剋火）。辛味の食物は皮毛を養うが取りすぎると却って皮毛を傷する。辛味が過ぎた時は、火性の苦味のもので制御（火剋金)。

方位と四季（冬）

北方と冬

北の方角は冬にあたり、陰気が強く寒を生じる時。寒いと水蒸気は凝集して水を生じる。水は大海にはいると鹹味を有し、鹹味の食物は人体内に入ると腎に行く。

腎と骨髄

腎は骨髄を主どる。骨髄からは水生木の相生の法則によって、肝の働きを生じる。腎は耳の働きを司る。

冬の特徴

このようなわけで、冬時には、神は天にあっては寒として作用し、地にあっては水の働きとなり、人体内にあっては骨となり、五臓では腎、色では黒、音は羽、声は呻、病変としては憤えとなって現れる。五官では耳となり、味は鹹、精神的な動きは恐れとなって現れる。

過剰な恐れの調整

恐れおののくと腎機能が傷害される。恐れにとりひしがれた時、思いを与えてやると、土剋水の法則で異常な恐れが抑制される。寒は血の働きを傷害（水剋火）するが、寒が過剰な時は、燥（金生水）で抑制可。鹹味過食で血を傷るが、甘味が抑制する（土剋水）。

五行の色体表

古村和子のやさしい漢方基礎理論 ③ ＜五行説＞(ごぎょうせつ) (その1)

＜五行色体表＞

	臓	腑	五色	五味	志	官	体	支	季	悪	声	五液
木	肝	胆	青緑	酸	怒	眼	筋	爪	春	風	呼	涙
火	心	小腸	赤	苦	喜	舌	血脈	面色	夏	熱暑	言	汗
土	脾	胃	黄	甘	思	口唇	肌肉	唇	土用	湿	歌	よだれ
金	肺	大腸	白	辛	悲憂	鼻	皮毛	毛	秋	燥	哭	鼻汁
水	腎＝新腎	膀胱	黒	鹹	恐驚	耳＝二陰	骨＝倉	髪	冬	寒	呻	つば

＜五行説＞
五行説とは、古代中国の人が最い観察力で全ての（森羅万象）を観察し、法則性を見出したものです。
木・火・土・金・水の5つのグループに分類されています。
「横一列が1つのグループ」としてとらえます。
各グループ間に深い関係があります。（南）

睡眠	脳
足	腰
生殖器	
肛門	
尿道	

七曜

ポジティブ（陽）	ネガティブ（陰）
1/7	6/7

※ 漢方の健康観はバランスです。五行説のバランスは2種類あります。

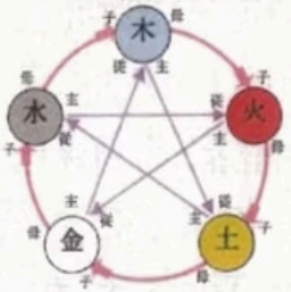
＜相生関係＞

＜母子関係＞とも言います。
『母が子を生み育てる関係』『守り合う関係』と考えます。
母が虚している（弱っている）と、子は守ってもらえずに子も虚してしまいますので、症状が出ているグループの母のグループにも注目するのが漢方流なのです。

＜相剋関係＞

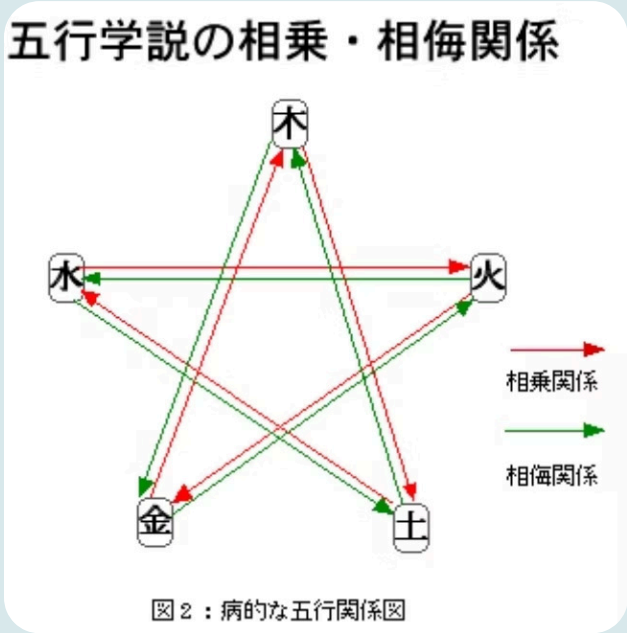
＜主従関係＞とも言います。
＜力関係＞のバランスを見ます。
ダーチョキパーのじゃんけんの様に矢印の根元の「主」が矢印の先の「従」に勝って、全体の力関係のバランスがとれている状態が理想です。

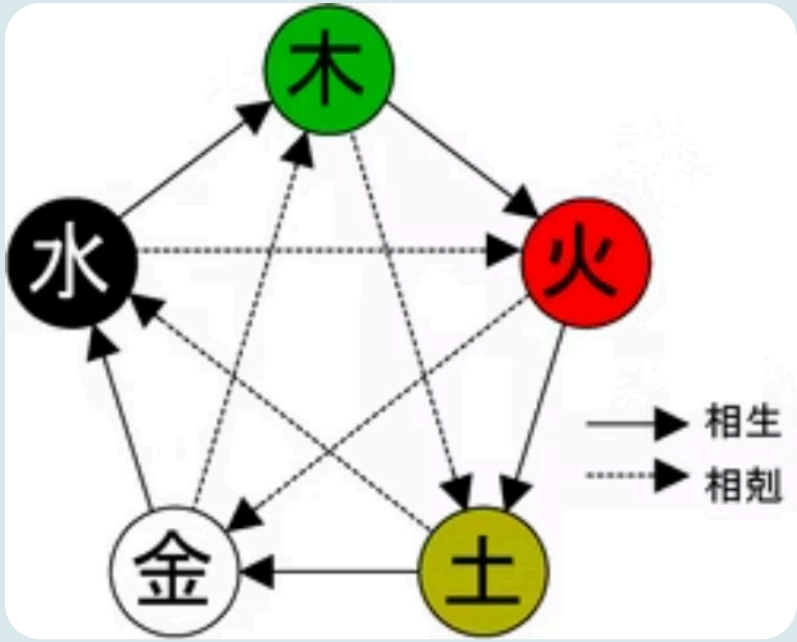
相生・相剋関係を組み合わせると



・「母が元気で子を守り、その子が母として子を守り……」の相生関係のバランスと、
・「主が適度に強して従を支配し、その従が主として従を適度に支配し……」の相剋関係のバランスがとれていると、
身も心も健康が保たれるのです。

五行の相乗と相侮





相乗の図

相乗とは、ある行が過剰になり、本来克するべき行を過度に抑制する状態を示しています。この図では、各行間の過剰な抑制関係が示されています。

相侮（反克）の図

相侮（反克）とは、本来克されるはずの行が逆に克する行を抑制してしまう異常な状態を示しています。この図では、通常の五行の関係が逆転した状態が表現されています。

五行の相生と相克

- 相生と相克の基本

相生　（病的：母病及子）

五行の順番は、人体発生の順：腎→肝→心→脾→肺。"生""克"は正常状態を保つためのコントロールを意味する。A乗BはAの病気がBも病気にする。C反克Dは、本来Cが、Dの病気予防をしているはずが、Dの病気がCを病気にする。

相克（病的：相乗、反克）

- 臓腑間の相生関係

肝生心：肝は疏泄をつかさどり、全身の陽気の調節をする。春に肝気は強くなる。真っ先に肝気を伝えるのは心である。

心生脾：君火によって、脾はうまく作動する。

脾生肺：脾で作られた精微物質が肺で真っ先に運ばれ肺を潤す。

腎生肝：腎の陰性物質が沢山出来ると、肝の陰性物質も沢山出来る（病的：水不函木）

- 臓腑間の相克関係

腎克心：心の火は君火で強い。強すぎると病気になる。それを予防する意味で腎から水を上げて冷ます。心経実火（不眠・煩躁）で、腎水不足のことがあると舌炎がおこりうる。滋陰降火（心火瀉し補腎水：心腎相交：黄連阿膠湯）

心克肺：頻度は少なめ（相乗：心不全で肺水腫）。反克（肺炎で心の状態が悪くなる｛肺性心｝）の頻度が多い。

肺克肝：肝の負荷を肺で緩和（緊張を深呼吸でほぐす？）。実際は、肝刑肺（反克）が多い（急性肝炎で咳や血痰）。

肝克脾：腹痛が起きないように、自律神経（肝）が調節する！?相乗：肝が弱ると胃腸の働きが悪くなり嘔吐下痢となる（肝脾不和）（木乗土）。反克：最初に下痢があり、肝炎が起きてくる急性A型肝炎（土虚木乗）。

脾克腎：貯まりやすい腎水を、脾でさばく。脾陽虚が腎陽虚を引き起こす（相乗）。腎炎悪化で下痢（反克）。益火生土（腎陽を補い脾陽を温煦）

症例　五行理論を活かした治療の実際

【症例概要】
女性：72才/中肉中背/某年3月2日/初診

【主訴】
舌痛症（1年前から、諸検査で原因不明）。易疲労。

【現病歴・既往歴】
4年前から別居の夫の世話、鬱病で眠剤・安定剤常用（5ヶ月前に便秘悪化で中止）。半年前に死亡。20年間、キッチンドリンカー、5年前に飲酒中止。10年前から視力低下・甲状腺機能低下指摘される。物の凹凸不明で、2週間前に眼内レンズいれるも不変（**肝鬱・肝血虚**）。若年より動悸・不整脈あり、横臥にて改善（**心気虚**）。寒がり、手足冷で痛い位、排尿10回以上／日、足腰だるい、足痛、指先痛。冷えのぼせ（**腎陽気虚**）。時折、後頭部から頭頂部にかけての重痛い頭痛（**上竅不通・湿滞**）。多夢、浅眠（**心神不寧←心気虚**）。発汗過多（衛気虚）。胃腸丈夫だが便秘傾向でゲップ・ガス多い、易鼻血・青染み（**木乗土**）（47才乳癌・子宮筋腫手術後の閉経で怠惰感悪化）。

1 診断

【舌診】体：淡暗。瘀点多数（**血瘀**）。

【脈診】細沈無力稍弦68／分（**心気虚**）

【治法】疏肝解鬱活血化瘀補心気。

2 処方

【処方】

①炙甘草湯合補中益気湯加牡丹皮3、桃仁3、蘇木2、厚朴3、肉桂3、炮附子3、大黄1

②当帰四逆加呉茱萸生姜湯

3 経過

【経過】

X／3／30（某年3月30日）：**手足温まり始めた。指先痛10→7。尿回数↓、排便量↑、不整脈回数↓、青染み↓**
処方①→②：処方①去蘇木加延胡索3、小麦5に変法。

X／4／28：全体に少しづつ改善

1 **処方変更**

処方①ー2＋処方③（水蛭1、蚯蚓1、しゃ蛭1、大黄1）

2 **X/5/12の経過**

X/5/12：**白米の味が分かりだした。**今まで味不感。

3 **X/5/26の経過**

X/5/26：**下半身がだるい。頭痛不変。指先痛、不整脈著減。舌痛血減った感じ。**

処方①ー3（炙甘草湯合補中益気湯合加味逍遥散加減方）＝①ー2＋山梔子2、白芍3、茯苓3、白朮3、薄荷3

その後：**舌痛血減る。頭痛、舌痛（ヒリヒリ感）減少。**

4 **X/7/5以降の経過**

X/7/5受診時 **処方③開始して倦怠感強い。**

処方①ー2＋**折衝飲**に変法。しばらく著変無し。

X/11/2：**便秘、頻尿、足冷やや改善**したが、**頭痛が再発。**

吸い玉療法（一種の頭部瀉血）開始。

X/12/25：**身体が熱く、汗ばむ（上熱下寒）。頭痛減少。熟睡。**

鼻汁（白～黄色）が咽に沢山おりてくる。

くしゃみ・鼻水以前から多い方（**肺と腎は母子**）。足は軽い。

1. **鼻炎症状と全般的改善**

細辛・五味子・麻黄・白芍薬・乾姜など追加したが鼻炎症状改善しなかったが、全般的に体調が良く、食欲旺盛、外出も増えたので請薬のみが続く。

2. **呼吸器症状の出現**

X＋1/7/24：5月**息苦しかった。息が吸いにくい**感じある。（腎不納気＋心気虚！？）。6月20日～7月15日風邪をひいたが放置。**八味地黄丸追加。**

3. **鼻汁の改善**

X＋1/7/29：**鼻汁が80%消失**；五行で子を治療して母を治療。舌痛かなり良くなったがあまり改善を感じない

4. **舌症状への対応**

X＋1/8/20：舌症状に対し、**処方③（動物性祛痰薬）を以前の1/6追加服用開始。**

5. **全体的な改善**

X＋1/9/16：**舌の瘀血やや改善。八味丸服用して鼻汁消失。見えにくかったが見える部分が拡がった（水生木）。**足の浮腫減少（補腎陽）。

舌所見

1

症状の改善

X＋1／10／11：**頭痛・肩凝り改善した（〇〇湿・活血）**。最近、他の服用薬は変更せず、処方①ー2（炙甘草湯合補中益気湯加減）の服用量を30%増加したところ、**舌痛が減少して、改善してきた。**

2

動物性生薬の効果

動物性生薬は活血に有効だが倦怠感が強い。中止すると頭痛悪化、つまり**血瘀悪化**する。

これを極少量併用だして、やや舌痛も改善傾向を認めたが、もう一つであった。

3

補心気の効果

そこで処方①ー2の服用量を増加させて、**補心気を強めたところ、頭痛、舌痛の改善がみられた。**

つまり、補心気が活血を助けた。

まとめ

五行理論の基盤

東洋医学的診断は陰陽虚実表裏寒熱の八綱弁証によっておこなわれるが

五行理論の採用

複数の因子の相互対立相互依存の関係性を説明するために五行理論が採用された。

人体への適用

また自然界の五行と同じように人体の中にも五行の原理が生きているとして、木火土金水の自然界の五行に、肝心脾肺腎の五臓と、胆小腸胃大腸膀胱の六腑をあてはめて人体の中に五行理論をあてはめた。

相互関係の理解

さらに五行の中に、相生、相克の概念と、相乗、相侮の概念を当てはめて、多くの因子がが互いに影響しあう生命現象をひもとき、臓腑相関の考え方を深めた。

臨床的意義

これによって原因→結果という一方向で還元主義的な考え方を超えて、複雑な事象に対応した治療戦略が取り得るようになった。

ただし、臨床に基づかない五行理論は「絵に描いた餅」に陥りやすいため、事実に基づいた五行理論を発展させていくことが何よりも大切である。